

Community Welfare Total Care Promotion Project

トータルケアNEWS

No.62 2016. 11. 30

発行 社会福祉法人 秋田県社会福祉協議会
〒010-0922 秋田市旭北栄町 1-5
TEL 018-864-2714 FAX 018-864-2742
URL <http://www.akitakenshakyo.or.jp/>
E-mail chiiki@akitakenshakyo.or.jp

CONTENTS

「孤立する人が生活に輝きを
取り戻す事業」
～食のコンシェルジュ事業の取組み～
・藤里町社会福祉協議会

「孤立する人が生活に輝きを取り戻す事業」～食のコンシェルジュ事業の取組み～

藤里町社会福祉協議会 事業担当 加藤 静・菊池 まゆみ

藤里町社会福祉協議会では、平成27年度WAM（独立行政法人福祉医療機構）の助成を得て「食のコンシェルジュ事業（孤立する人が生活に輝きを取り戻す事業）」を実施しました。

同27年度から、福祉の立場からの地方創生事業への挑戦「町民全てが生涯現役事業」を実施するにあたり、「支援する人・支援される人」という地域の固定観念が事業を矮小化する可能性を払しょくする狙いがありました。

そして、地域の方たちを「支援が必要な側の人・支援をする側の人」と色眼鏡で見ていたのは、私たち福祉職だったという反省と同時に、地域福祉の可能性を大きく広げる機会となる事業でした。

事業内容については、43ページにわたるWAM助成事業報告書より抜粋させていただきます。（ご希望の方には報告書を送付いたします）

はじめに

孤立支援が必要な人とは誰かを、考え続けた1年間でした。

地域福祉の相談援助業務に携わるうちに、孤立の問題は家族構成の問題ではないことを感じていました。一人暮らし高齢者等の孤独死対策と社会から孤立しがちな人たちに対する孤立支援は違うのではないのか。いや、違う問題として対応する必要があるのではないのか、と感じていたのです。

孤立を感じている人は多種多様です。配食サービス利用者の老女Aの家庭では、Aが弁当を受け取って一人で食べ、寝室に入ってから若夫婦や孫が帰宅して賑やかな夕食が始まるそうです。デイサービス利用者のB女は、騒々しいのは嫌いだが自分が家にいると仕事で忙しい息子夫婦に迷惑をかけるので、週5日のデイサービス利用に文句を言わないそうです。介護者のCや、子育て中の専業主婦のDは、社会からの孤立感を感じるそうで、外出そのものが怖くなるそうです。障害者の若い女性から、お買い物ツアー事業の対象者はどうして一人暮らし高齢者なのか、と聞かれたことがあります。

ですが、当社会福祉協議会はそのことを直視せずにまいりました。

社会的孤立に対する支援はこれまで、一人暮らし高齢者や障害者、ひきこもり者等と対象者を決めただけで、配食サービス事業や買い物支援事業を行うかどうかに目を向けてきたのです。個々の人たちが孤立感を感じているのかどうか、孤立感の解消につながる支援になっているのかどうかの視点が欠けていました。

もちろん、孤立の問題は家族構成の問題とは違うのではないかと、地域に向けて様々な機会に問いかけてきたつもりですが、効果はでませんでした。いえ、社協職員の意識さえ変えられなかったのが現状でした。

そこで今年度、WAM助成金を得て「孤立する人が生活に輝きを取り戻す事業」として、全町に向けて「孤立とは何か」を考え、あらためて「孤立支援が必要な人とは誰か」を考えるための様々な事業を展開しました。孤立支援対象者＝特別な人という強すぎる固定観念にくさびを入れるため、「食を楽しむ」という視点で実施しました。

本事業は、生活の基本である「食」を「栄養価を考える食」ではなく「楽しむ食」の視点に立ったことで、多くの住民の参加を得られ、「特別な人を対象にした孤立支援事業」からの脱皮につながったと手応えを感じています。

「孤立とは何か」を直視しないままに事業展開をしてきた、これまでの反省があります。あらためて「孤立支援が必要な人」を多くの町民と一緒に考え直したことで、向かうべき方向の確認ができたと思っております。

事業の実績

主な実施内容	
1	「食のコンシェルジュ」の配置（3人） <ul style="list-style-type: none">・レシピ集の作成や配布のほか、配食サービスの献立を工夫・支援が届いている人といない人、事業に誘いたい人を割り出して対象者名簿を作成
2	配食サービス事業の新たな展開 <ul style="list-style-type: none">・配食サービスの対象者等の検討とコンシェルジュの派遣、ふれあい弁当の配達・一人暮らし高齢者以外に対象者を拡大した「豚汁の日」及び「シチューの日」事業の実施



3	お買物ツアー事業の新たな展開 <ul style="list-style-type: none"> ・月2回お買物ツアー事業の開催 ・ソフトクリーム製造機器の購入、PRとアンケートの実施
4	山と畑の恵みを楽しむイベント事業の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・1回目：婦人会を中心に町内の山や畑の食材を生かした食のイベント開催 ・2回目：プロのアレンジを加えた料理の試食会形式のイベント開催
5	食を楽しむイベントの実施 <ul style="list-style-type: none"> ・「こみっと」感謝祭の場でバイキング実施、ソフトクリームのPR試食、レシピ集の作成と配付

主な実施事業と地域の声

※報告書から一部抜粋

◆職員の声

◎会長チェック

月	日	実施事業内容	対象者名簿作成状況 名簿作成メンバーの言い訳
4	1	<p>通年事業の開始</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食のコンシェルジュ担当配置 ・配食サービス事業実施と献立の見直し ・お買物ツアー事業実施（月2回） ・レシピ集作成 ・対象者名簿作成 <p>◎これまでの孤立対策対象者枠を超えた仮表1を準備（WAM助成申請に提出済み）。いよいよ、孤立対策の概念を変えられるかどうか、「孤立する人が輝きを取り戻す事業」の始動です。</p>	<p>※この時は確かに理解していました。輝きを取り戻していただくために孤立する人達を見つけ出そうと、やる気満々でした。</p>   <p>ボランティア団体の皆さんも職員も例年通りのイメージから脱皮できなかったようです。</p>
	21	<p>ボランティア団体連絡協議会総会で「（孤立する人が）生活に輝きを取り戻す事業」について説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆社協との共同事業、年3回の「ふれあい弁当」の対象者・やり方等を変えることについては、特に反対も出なかったから大丈夫だと思います。 ◎一抹の不安。反応のなさはつまり、説明不足で理解して貰えなかった状態とも解釈できるのですが…。 	
	23	<p>対象者名簿作成チームの立ち上げ</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆はいはい、分かりました。でも、大袈裟じゃありません？ わざわざチームを立ち上げるほどのことですか？ 	
5	18	<p>対象者名簿作成チーム会議で趣旨説明！</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆そんな話は、聞いていません。一人暮らし高齢者以外の孤立支援が必要な人を探すなんて、無理です。第一、そんな人に接触すること自体が無理だと思います。 ◆『食のイベント事業』に誘いたい人を探す？ それなら大丈夫、最初からそう言ってくれれば分かるのに。 	

28	職員全体会議で「(孤立する人が)生活に輝きを取り戻す事業」の開始について趣旨説明！ ◆楽しそうな事業ですね ◆大変そうな事業ですね	
6 11	対象者名簿作成チーム会議 ◆大丈夫です、殆どもう、名簿は出来ていますから。 ◎???一歩も進んでいない状況という言い方が、正しいと思うのですが…。	

「山と畑の恵みを楽しむイベント①」事業対象者選定

※報告書から一部抜粋

- ・実施日時：10月1日
- ・実施場所：福祉の拠点 「こみっと」
- ・実施経緯：食の楽しみを見つける事業を行う。藤里町の田舎料理を絶やさないために、山の恵み、畑の特産品作りに向けて、田舎料理の試食会を行う。婦人会が料理を作り、老人クラブ等がモニターになる。
- ・実施対象：社協デイサービス利用者、GH 美里園・特養藤里入居者、近隣老人クラブ会員、地域包括対象者リスト対象者等がモニターとして参加。
- ・スタッフ：大沢婦人会、粕毛婦人会、藤琴婦人会、米田婦人会、地域包括支援センター、社協職員（ヘルパー事業所職員等）、こみっと登録生。
- ・実施目的：孤立する人が生活に輝きを取り戻す事業。孤立する人の力を引き出せるか。支える側（婦人会の皆さん）と、支えられる側（デイサービスの利用者の皆さん）の関わり合いから、新たな事業展開を模索する。
- ・成果と課題

【事業の準備期】



【事業当日】



【参加者の声一部紹介】

- ・昔作った料理だ。懐かしかった。昔こめぬきの煮つけを秋田にもって行けば喜ばれた。(デイ利用者)
- ・大変でしたが、やってよかった。皆さんの笑顔でそれだけでうれしい。(婦人会)

孤立する人が生活に輝きを取りもどせましたか？

※報告書から一部抜粋

【事務局長から】

「食」から支援を考える。すごいことだと思いました。「食」に関係ない人はいない。みんなに係るテーマだと。しかも栄養価を考えて作り、お届けしたいお弁当がやっぱり孤食につながっているなんて。

今まで支援といえば介護とイコールで、「弱くなった人」「年をとった人」……。介護予防の対象者を考えるとき、ついそう思っていた自分。何度も会議を重ねて、この事業に誘いたい人を選んでも、やっぱりボランティアさんたちにうまく説明できない自分。そのたびに現場は大混乱。でも、私自身が、なかなかたどり着けなかった目的地にボランティアさんたちは先回りしていました。「私たちは自分の地域でやってみる。」「地域みんなに声をかけて、みんなで作って、みんなで食べる。」あんなに悪戦苦闘していたのに、なんだか自信満々の笑顔で。

支援することが支援される側との間に大きな溝を作ってしまうことに、支援する人は気が付きにくい。介護保険が始まって介護や支援という言葉に惑わされていました。

この事業で、これまで「自分が輝いていいのか」と遠慮していた人も輝けたと私は思います。

【「孤立する人が生活に輝きを取り戻す」事業担当】

「食」の事業は単純においしくて楽しいものだった。これまでも「食」が関係する事業はいろいろあったが、楽しんで良いものだとは思って携わっていなかった。

「福祉の仕事」も楽しむものだとは思っていなかった。職員自身が楽しいと思えない事業に、関わる協力者や参加者が楽しいと思うだろうか？一方的に利用してください、楽しんでください、食べてください、と言われる側の気持ちは・・・「支援者」としての自分の仕事を優先して考えてこなかったのかもしれない。「社協」と「地域」を区別していたのは、他でもない私たち職員だったのかもしれない。

「食」は、これまで以上に多くの方々を巻き込む事業となった。それほど無理なく、むしろ自然に。ほとんどの人にとって食べることは楽しくて幸せなことだ。その幸せを一緒に楽しむ、一緒につくっていくことが、結果的に多くの人参加を促し、必要な支援や孤立の解消につながった。他の事業にも同じことが言える。視点一つで見えるもの変わるもの大きさに、事業を終えて、報告をまとめて、やっと気づいたような気がしている。

【対象者名簿作成担当から】

「一人暮らし高齢者・高齢者世帯」が頭から抜けないままの名簿作成でした。「食のイベント事業」に誘いたい人と言われ分かったつもりが、介護者、家族のいる人は大丈夫だろうという思いに駆られてしまい、自分が作成した名簿は障害者や同居家族の人はたまたま入っただけでした。回を重ねる度に対象者に対する見方が広がり、「孤独」にもいろいろあることが分かったような気がします。今回は対象者も関わった人も最後は笑顔（安堵）が見え、「輝き」が見えたのではないかと思います。（名簿は今後も活かしていきたいです）